「日本語と英語と韓国語」と「韓国語と英語と日本語」
―日本人大学生と韓国人大学生の外国語学習―

奥　野　浩　子

複数の外国語を学習する場合、最初に学んだ外国語とそれ以降の外国語学習には何らかの関連があると思われるが、それはどのようなものだろうか。この疑問を少しでも解明しようと、2005年秋から2006年春にかけて、日本人大学生214名、韓国人大学生113名に対して意識調査を実施した。

調査の目的は、①初めて学習した外国語である英語の得意分野・不得意分野と、その後に学習する日本人大学生にとっての韓国語の得意分野・不得意分野に関連があるかどうか。また、同じく、初めて学習した外国語である英語の得意分野・不得意分野と、その後に学習する韓国人大学生にとっての日本語の得意分野・不得意分野に関連があるかどうか、②最初に学んだ英語の知識が次の外国語の学習に役立っているかどうか、③英語の知識を次の外国語学習に役立てている学生と、そうではない学生の間に有意な差が見られるかどうか、④学部による差が見られるかどうか、⑤それぞれの外国語の学習期間と、得意分野・不得意分野に関連があるかどうか、を知ることであった。しかしながら、②については英語の知識が役に立っているという回答があまりにも少なく、したがって、③に関しては分析をあきらめることにした。また、④に関しては、韓国の大学の学部・学科に対する知識を欠いていたことと、日本語の質問用紙を韓国語に翻訳する際に基本的なミスを犯したことで、回答者に混乱を招いたため、集計するに至らなかった。⑤に関しては、「学校教育においての」学習期間を想定していたのだが、質問票の表現が言葉足らずで、これも集計するに至らなかった。したがって、本稿では、①に関しての集計結果とそれに基づく考察を述べることにする。

日本でも韓国でも、最初に学習する外国語は英語のようである。韓国の大学から弘前大学へ留学してきた韓国人留学生が、日本語を流暢に話すことに驚いたが、日本語は第二外国語として学んだものであることを知り、さらに驚いた。韓国人留学生の何人かが私の担当する英語のクラスに出席したが、その英語力はクラスで最上位レベルであった。留学生として選抜されて来ているとは思うが、二つの外国語の習得に成功している事例を目の当たりにし、どのような学習方法をしているのか聞いてみたが、本人たちはただ勉強しただけという答えであった。また、弘前大学に入学してから韓国語を学び、韓国の延世大学校韓国語学堂に一年間留学し、卒業前に韓国語能力検定試験６級(最上級）に合格した学生に、英語の知識をどのように利用しているかを尋ねたら、英語は全く忘れるようにしているという答えであった。最初に学んだ外国語である英語学習の取り組み方が、次の外国語学習に無関係ではないと思われるが、その相関をどのように実証できるかについて、現在の私には全くアイデアがない。そこでまず、二つの外国語学習における得意・不得意分野の相関を探ってみることにした。

TOEIC Newsletter, No.89(2005年1月)によれば、日本と韓国のIPテストのみの平均点は、1997～1998年では、日本が451点に対し韓国が480点、2002～2003年では、日本が451点に対し韓国は537点である。受験者数の違いや、社会人受験者の結果も含まれているとはいえ、数字からは日本が足踏み状態であるのに対し、韓国は大きく得点を伸ばし、日本と韓国のTOEICの得点差は大きく開いてきていることが伺える。日本語と韓国語は文構造がよく似ていて、さらに漢字語彙を持つ点でも似ている。日本人学生は、英語の次に韓国語を学び、韓国人学生は英語の次に日本語を学ぶ。英語を第一外国語として学んだ後に、互いの言語を学ぶ日本人学生と韓国人学生の、外国語に対する得意・不得意意識を基に、より効果的な外国語学習のあり方を探る第一歩としたい。

意識調査には、日本人大学生で韓国語・朝鮮語（以下、韓国語とする）を第二外国語としている214人に答えてもらった。その内訳は、弘前大学88人、慶応義塾大学50人、東京女子大学76人である。弘前大学では、非常勤講師のユン・ヨンエ先生にご協力いただき、慶応義塾大学と東京女子大学では、東京女子大学大学院教授の兼若逸之先生にご協力いただいた。韓国人大学生については、大学で日本語を履修している学生に答えてもらった。京畿大学校からの留学生クォン・ミジョンさんの協力で、京畿大学校の学生46人から回答してもらい、釜山大学校からの留学生ペク・スンファンさんの協力で、釜山大学校の学生67人から回答してもらった。学年別の人数は次の通りである。

日本人学生の学年別内訳

	人数	パーセント
1　年	170	79.4
2　年	28	13.1
3　年	7	3.3
4　年	3	1.4
不　明	6	2.8
合　計	214	100.0

韓国人学生の学年別内訳

	人数	パーセント
2　年	4	3.5
3　年	62	54.9
4　年	43	38.1
不　明	4	3.5
合　計	113	100.0

日本人学生では、圧倒的に１年生が多く全体の80%近くを占めている。２年生も合わせると92.5%になる。大学で初めて韓国語を学ぶのであるから、学習期間は学年とほぼ一致する。これに対して、韓国人学生では、３，４年生が93%であるが、大多数は上級学年になって日本語学習を始めたのではなく、学年が上がるほど学習期間が長くなっているようである。

得意・不得意分野に関する意識調査では、外国語学習の分野を、「音声」と「文字」という言語媒体と、「受信」と「発信」というコミュニケーション授受の方向を組み合わせて、次の４項目から「得意」あるいは「不得意」の分野を一つだけ上げてもらうという方法を採った。

A　書かれた文字を読んで理解する（文字受信）

B　音声を聞いて理解する（音声受信）

C　言いたいことを話して理解してもらう（音声発信）

D　言いたいことを文字で書いて理解してもらう（文字発信）

以下、日本人大学生214人の英語と韓国語それぞれの得意分野、不得意分野の単純集計を示し、次に、得意分野・不得意分野それぞれに関して、英語と韓国語のクロス集計を示した後、二つの外国語の得意分野の比率をＸ２乗検定にかけた結果を示す。次に、韓国人大学生113人に答えてもらった英語と日本語について、日本人大学の場合と同じ順で示す。最後に、日本人大学生と韓国人大学生の、英語の得意・不得意分野及び両大学生にとっての相手言語、つまり、日本人大学生にとっての韓国語と韓国人大学生にとっての日本語の得意・不得意分野をＸ２乗検定結果をもとに比較する。

日本人大学生

まず、日本人大学生の英語の得意分野と不得意分野をみてみよう。英語の得意分野として、「文字受信」を挙げる学生が70.6%と圧倒的である。次に多いのは「音声受信」で、15.4%である。二つの「受信」を合わせると86%にもなる。不得手分野をみると、「音声受信」が39.3%と一番多く、僅差で「音声発信」の36.9%である。この二つは「音声」に関わるものである。日本人大学生では、英語の得意分野は「受信―発信」という授受のうち、受け入れ方向である「受信」である。一方、英語の不得意分野は「文字―音声」という媒体のうち、「音声」である。得意分野と不得意分野が、一方は授受方向で表され他方は言語媒体で表される。

英語得意	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
文字受信	151	70.6
音声受信	33	15.4
音声発信	11	5.1
文字発信	16	7.5
無回答	3	1.4
合計	214	100.0

英語不得意	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
文字受信	14	6.5
音声受信	84	39.3
音声発信	79	36.9
文字発信	35	16.4
無回答	2	.9
合計	214	100.0

次に、日本人大学生の韓国語の得意分野と不得意分野をみてみよう。得意分野は「文字受信」が69.2%と圧倒的に多く、「音声受信」が11.7%でこれに続いている。両者をあわせると80.9%になり、英語の場合と同様、「受信」を得意とする学生が多いといえる。次に不得意分野であるが、36%で「音声受信」が一番多いが、「文字発信」と「音声発信」が続いている。不得意分野は「受信」と「音声」の両者である。

韓国語得意	人数	パーセント
文字受信	148	69.2
音声受信	25	11.7
音声発信	17	7.9
文字発信	15	7.0
無回答	9	4.2
合計	214	100.0

韓国語不得意	人数	パーセント
文字受信	15	7.0
音声受信	77	36.0
音声発信	55	25.7
文字発信	59	27.6
無回答	8	3.7
合計	214	100.0

日本人大学生の得意分野は、英語でも韓国語でも「文字受信」が圧倒的に多く、これに次ぐ「音声受信」を含めると80%以上が「受信」を得意としている。上で個別に見た英語の得意分野と韓国語の得意分野のクロス集計は以下に示す通りである。

		韓国語得意					合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	無回答	
英語得意	文字受信	113	12	10	11	5	151
	音声受信	21	7	3	1	1	33
	音声発信	7	2	1	1	0	11
	文字発信	7	4	3	2	0	16
	無回答	0	0	0	0	3	3
合計		148	25	17	15	9	214

二つの外国語の得意分野が一致する場合（表の太字囲み部分）の割合は57.5%である。この二つの言語は学習順序が一定であるので、最初に学習する英語の得意分野あるいは得意意識が、次の外国語学習に持ち越される割合がかなり高いといえそうである。

これを次のような形のクロス表にしてＸ２乗検定にかけたら、日本人大学生に関して、英語の得意分野と韓国語の得意分野は有意差５％で同じという結果になった。日本人学生は、英語でも韓国語でも得意分野の比率が一致するといえる。

		得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
言語	英語	151	33	11	16	211
	韓国語	148	25	17	15	205
合　計		299	58	28	31	416

次に不得意分野についてである。英語については「音声」に関わる分野を不得意とするものが全体の４分の３である。韓国語については、「音声理解」が36%で最も多いが、「音声発信」「文字発信」の３つの分野を合わせると９割にのぼる。上の得意分野の場合と同様に、英語不得意分野と韓国語不得意分野のクロス集計の結果を示すと次の通りである。

		韓国語不得意					合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	無回答	
英	文字受信	2	6	3	2	1	14
語	音声受信	3	36	17	25	3	84
不	音声発信	5	25	28	20	1	79
得	文字発信	5	10	7	12	1	35
意	無回答	0	0	0	0	2	2
合	計	15	77	55	59	8	214

得意分野で見たのと同様に、二つの外国語の不得意分野が一致する割合を見ると36.4%である。得意分野とは違い、最初に学習する英語の不得意分野が持ち越される割合は低いようであるが、二つの外国語の不得意分野は多様化している。ここには、英語の学習期間に比べ韓国語の学習期間が１，２年と短いことが関係して、どの分野にも不得意意識がぬぐいきれないのかもしれない。

不得意分野に関する検定結果は、有意差５％で二つの外国語の不得意分野の比率には違いがあるということになった。特に、韓国語の文字発信を不得意とするものが注目される。これは、調査対象の多くが１，２年生であることに関連すると思われる。英語の文字であるアルファベットには、

小学校でのローマ字から、中学・高校と６年間以上は見慣れ、書きなれているのに対して、韓国語の文字であるハングルには大学で始めて接して、見ることにも書くことにも慣れていないためであると考えられる。

		不得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
言語	英語	14	84	79	35	212
	韓国語	15	77	55	59	206
合計		29	161	134	94	418

韓国人大学生

英語の得意分野として「文字受信」が69%と圧倒的で、次いで23%で「音声受信」である。両者は「受信」とまとめることができるが、合わせると90%を超える。不得意分野では「音声発信」が46%で最も多く、28.3%の「文字発信」がこれに次いでいる。韓国人大学生は、英語では「受信」が得意分野になり、「発信」が不得意分野というように、得意分野と不得意分野は授受の方向の対立で捉えられる。

英語得意	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
文字受信	78	69.0
音声受信	26	23.0
音声発信	3	2.7
文字発信	1	.9
無回答	3	2.7
合計	111	98.2

英語不得意	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
文字受信	6	5.3
音声受信	20	17.7
音声発信	52	46.0
文字発信	32	28.3
無回答	1	.9
合計	111	98.2

日本語の得意分野としては「文字受信」が52%と半数を占め、「音声受信」の22%がこれに次ぐ。

「受信」を合わせると約４分の３である。不得意分野では、「音声発信」が37.2%、「文字発信」が33.6%で「発信」を合わせると７割である。日本語の得意分野・不得意分野も、英語の場合と同様、授受の方向の対立で捉えられる。

日本語得意	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
文字受信	59	52.2
音声受信	25	22.1
音声発信	17	15.0
文字発信	8	7.1
無回答	2	1.8
合計	111	98.2

日本語不得意	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
文字受信	7	6.2
音声受信	20	17.7
音声発信	42	37.2
文字発信	38	33.6
無回答	4	3.5
合計	111	98.2

韓国人大学生は、単純集計では、英語でも日本語でも「受信」を得意分野とするものが多いという点では共通しているが、次のようにクロス集計をして、二つの外国語の得意分野が一致するものの割合を求めると49.5%である。

		日本語得意					合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	無回答	
英語得意	文字受信	44	16	12	6	0	78
	音声受信	12	8	3	2	1	26
	音声発信	1	0	2	0	0	3
	文字発信	1	0	0	0	0	1
	無回答	1	1	0	0	1	3
合計		59	25	17	8	2	111

韓国人学生の得意分野に関して次のようなクロス表で検定の結果、有意差５%で英語の得意分野

と日本語の得意分野は一致しないという。

		得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
言語	英語	78	26	3	1	108
	日本語	59	25	17	8	109
合計		137	51	20	9	217

「発信」に関して、英語よりも日本語で得意とするものが多い。文字発信に関しては、調査対象が３，４年生であることから、日本語の文字にはかなり習熟していることと、韓国語と日本語は文の構造が似ていることが原因と考えられる。音声発信に関しては、韓国語の母音の数が日本語の母音の数より多いため、韓国語と文構造が似ている日本語の音声発信は容易いためと考えられる。

韓国人大学生の不得意分野に関しては、単純集計では、英語でも日本語でも「発信」を不得意とするものが多かった。二つの外国語の不得意分野のクロス集計の結果は次の通りで、これまでと同様に、二つの外国語の不得意分野が一致する割合を見ると45.8%である。

		日本語不得意					合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	無回答	
英	文字受信	2	0	0	4	0	6
語	音声受信	0	4	7	8	1	20
不	音声発信	2	8	29	12	1	52
得	文字発信	3	8	6	14	1	32
意	無回答	0	0	0	0	1	1
合計		7	20	42	38	4	111

不得意分野の検定結果は、有意差５%で二つの外国語の不得意分野の比率に違いがないという結果であった。

		不得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
言語	英語	6	20	52	32	110
	日本語	7	20	42	38	107
合計		13	40	94	70	217

日本人大学生と韓国人大学生の比較

英語の得意分野に関して、日韓の大学生には有意差５％で差が認められる。大きな差は「文字発信」の比率である。「音声発信」においても日本人大学生の比率が高いことから、日本人大学生は韓国人大学生に比べ、「発信」を得意とするといえる。韓国人大学生は日本人大学生に比べて、「音声受信」を得意とする比率が高い。これは、韓国語の母音体系が日本語の母音体系よりも英語に近いことと、日本語と違って、韓国語には英語と同じく閉音節が存在することが関係していると考えられる。

		英語得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
学生	日本人	151	33	11	16	211
	韓国人	78	26	3	1	108
合計		229	59	14	17	319

英語の不得意分野に関しても両国の大学生には有意差５％で違いがある。日本人大学生では「音声受信」を不得意とするものの比率が韓国人大学生に比べてかなり高い。これは、上の英語得意分野の結果と表裏をなすもので、日本語の母音体系が英語とはかなり違うこと、日本語には閉音節がないことが関係すると思われる。

		英語不得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
学生	日本人	14	84	79	35	212
	韓国人	6	20	52	32	110
合計		20	104	131	67	322

日韓大学生の相手言語に対する得意分野にも有意差５％で違いがある。韓国人大学生は、日本語の「音声」分野に関して受信でも発信でも、比率が高い。ここには、両言語の母音体系が大きく影響していると思われる。韓国語の母音には、日本語の５つの母音がすべて含まれるといってもよく、韓国人大学生にとって日本語の「音声」はさほど困難は覚えないと思われる。

		相手言語得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
学生	日本人	148	25	17	15	205
	韓国人	59	25	17	8	109
合計		207	50	34	23	314

相手言語の不得意分野でも、有意差５％で違いがある。日本人大学生では、韓国語の「音声受信」を不得意とする比率が高い。上の相手言語の得意分野で指摘したこととは逆に、日本人大学生にとっては、韓国語の母音の習熟にはかなり困難を感じると思われる。たとえば、日本語の「お」に聞こえる音が韓国語には二つ存在する。このような場合には、聞き分けるのも、言い分けるのも難しいはずである。

		相手言語不得意分野				合計
		文字受信	音声受信	音声発信	文字発信	
学生	日本人	15	77	55	59	206
	韓国人	7	20	42	38	107
合計		22	97	97	97	313

まとめ

日本語と韓国語と英語の母音の数は、日本語、韓国語、英語の順に多くなる。また、韓国語と英語には閉音節があるのに対し、日本語には閉音節がない。このような特徴を考えると、日本人大学生が韓国人大学生より英語の「音声」に関して困難を感じることは理解できる。韓国人大学生の得意・不得意が「受信」対「発信」という授受の方向で捉えられるのに対し、日本人大学生では「受信」対「音声」と特徴付けられることからも、日本の英語教育においては音声教育を重視する必要があると思われる。少なくとも、英語の音声教育が充実されれば韓国語の音声に関する不得意意識は減るのではないだろうか。

日韓大学生の英語得意分野の比較で、日本人の方が韓国人よりも「発信」を得意とする率が高いことが示されたが、韓国人大学生の得意・不得意が授受の方向で特徴付けられ、「発信」が不得意であることによると思われる。韓国人大学生は英語の「音声受信」を得意とするのに、「音声発信」では韓国人大学生より日本人大学生の方が得意とする率が高かった。受信できるのに発信できない原因はどこにあるのだろうか。この原因を探るのは今後の課題である。韓国人大学生は、日本語に関しては「音声受信」も「音声発信」も得意とする率が高いのであるから、なぜ英語では「音声発信」に困難を覚えるのかは問題である。日本語は韓国語より母音の数が少ないから、受信も発信も得意とする率が高く、英語は韓国語よりも母音の数が多いことで、受信はできても発信ができないということなのであろうか。

今後の課題

今回の意識調査では、日本人大学生と韓国人大学生の学年構成に違いがある。したがって、外国語学習期間の差がある。この差が、日韓大学生の比較に影響を与えている可能性は否定できない。また、質問票の不備という基本的なミスもあった。一定の傾向はつかめたように思われるが、今回の反省を活かし、再度意識調査を実施してより有効な調査結果に基づいて、有効な外国語学習のあり方を考えてみたい。